

ラマ教寺院の年中行事 －内モンゴル「大召寺」のマニ法会を対象に－

グンドゥンアスアル
根敦阿斯尔

はじめに

本論では、中国内モンゴルのラマ教の年中行事である「マニ法会」が、現代社会においてどのように変遷してきたのかを明らかにすることを目的としている。

このような変遷をおさえていくことは、これからのラマ教が、現代社会の流れの中でどのような発展を行なっていくべきなのかということを考える視点へと繋がると思われる。このような視点を提供するために、主に理論を勉強すると同時に、民俗学の理論の角度から、1993年から2004年までの11年間に、自身の寺での実際の生活体験という特殊な角度から見たもの、聞いたもの、感じたもの及び経書から学んだものを整理する。その上で、2010年、夏休みを利用して、大召寺の年中行事に於いてマニ法会の現状、僧侶たちの現状を調査した。これらの資料を分析して、大召寺の年中行事に於いてマニ法会、寺と民衆の関係を分析し、本論を執筆したいと思っている。

調査地としては、現在の内モンゴル自治区フフホト市のラマ教寺院において、ラマ教文化の中心となっている大召寺を設定する。

研究の背景

大召寺は、1579（明朝万暦7）年に、内モンゴルトゥムディ（土默特）部落の首領アルタンハン（阿勒坦汗）が建設した。この大召寺が、現在の中国内モンゴル自治区フフホト市にあるもので、大召寺は431年の歴史を持つラマ教寺院である。

モンゴル族はシャーマニズムを信奉して、13世紀中頃から、モンゴル族の上層でチベット仏教のニンマ派（紅教）を信奉することを始めた。16世紀70年代、アルタンハンはチベット仏教を取り入れた（ゲルク派、黄教）。そしてモンゴルトゥムディ部落から全体のモンゴル地域にあまねく伝わったのである。明の時代後期から清の時代の中頃まで、ラマ教（黄教）がトゥムディモンゴル族の地域に於いて、かなり発達した。

フフホト市は、清朝時代から解放以前まで、「召城（お寺の町）」とも呼ばれるほど、ラマ教寺院があった。その数は、7か所の大召寺、8か所の小召寺、72か所の小さな廟であった。従って、フフホトは「召城」だと誉め讃えられる。民間に「7大召（寺）、8小召（寺）、72個綿綿召「(寺)」と言う。「大召（寺）」は明・清時代の有名な「7大召（寺）」の一つであり、もっとも大きく且つ著名な寺である。大召寺は仏教聖地だけでなく、その上国内外に知られる有名な観光地でもある。殿宇建築、真に迫る彫塑、

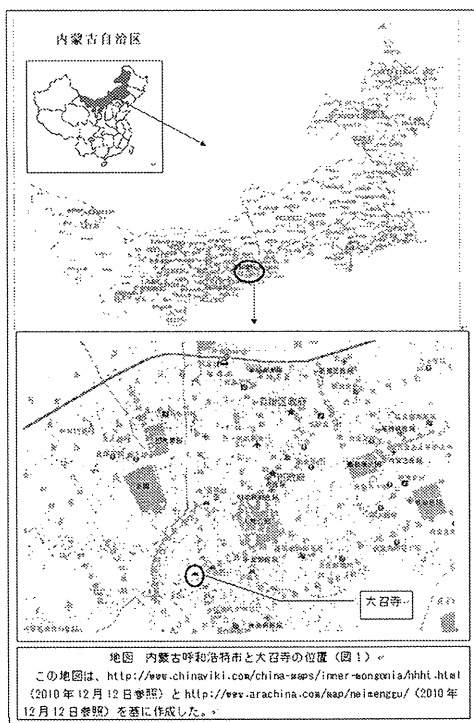
※神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科前期
課程

精巧で美しい壁画、浩瀚広大な経巻、神秘的な跳鬼（チベット語でチャムと呼ぶ）、広大な鍊丹会（チベット語でマニウリルと呼ぶ）と仏教音楽などが、独特な寺院文化を構成している。

私は1993年に大召の大ラマ（私の祖父）の推薦で大召に入ることになった。11年間ラマたちと一緒に生活し、チベット語の経書を学び、寺院関係の年中行事に参加してきた。このような背景から、中国内モンゴル自治区フフホト市の大召寺は、現在、フフホト市のラマ教文化の中心となっている。そのため、本論では、大召寺を調査地（図1）に設定した。

二. 大召寺の年中行事

1. 年中行事



まず、2010年8月に調査した大召寺の年中行事の現状を列記する。ここで列記するラマ教の年中行事は、すべて旧暦で行われている。（表1）

大召寺の年中行事（表1）

行事の日取り	活動の内容
1月8日～1月15日	祈願大法会 午前、午後 経を誦する
1月14日	午前 パリンを送る活動
1月15日	午前 晾仏 跳鬼 寺廟の周囲を回る
4月8日～4月15日	釈迦牟尼の誕生を記念する 午前、午後 経を誦する
5月13日	午前 オボ祭り
6月8日～6月15日	大法会 午前、午後 経を誦する
6月14日	午後 パリンを送る活動
6月15日	午前 晾仏 跳鬼 寺廟の周囲を回る
8月14日～8月21日	マニ法会7日 昼夜 休みなく経を誦する
10月23日～10月25日	宗喀巴大師が成道を記念する 午前、午後 経を誦する
12月23日	かまどの祭り
12月25日	仏灯をつける活動
12月30日	夜間に祈福経を誦する。福の神を迎える
毎月の行事	
2日	午前 経を誦する
8日	午前 経を誦する
15日	午前 経を誦する
25日	午前 経を誦する

その他、固定されてない葬式や平安経や祈福経など信者の依頼により行われる法事がある。また、実際にラマ寺院において行われる年中行事は、同じ宗派でも地域により多少の異なりがある。さらに、ラマ教寺院の年中行事に差異を生むものとして、活仏の有無がある。昔から活仏の有無は、その寺院の年中行事の際、同じ行事であっても日取りが異なり、読経のリズム、踊りの型なども異なる。このように、ラマ教寺院の年中行事の全体を捉える事は難しいため、本論では、すべての年中行事ではなく、まずはマニ法会を詳細に記述にする。

2. マニ（嘛呢）法会の起源

(1) 六字真言

ラマ教に於いて、マニ法会は、チベット語でマニウリルと呼ばれる丹薬を成就する法会である。そのため、マニ法会は、マニ丹会とも呼ばれる。マニ（嘛呢）とは「唵、嘛、呢、叭、咪、吽（オン、マ、ニ、パット、メ、ホン）」を簡略したものである。ラマ教に於いて「唵、嘛、呢、叭、咪、吽」は、六字真言、六字大明呪、観音菩薩の心呪と観音大悲呪と称し、秘密蓮華部から根本真言を取ったものである。密教に於ける各種呪の中でも極致の呪と言われている。

マニ経に於いて六字真言は「唵」は仏陀の心、「嘛呢」は如意宝、「叭咪」は蓮華、「吽」は金剛の心という意味である。六字真言を誦することによって衆生を済度する目的を達成し、「唵」は世界の生死の苦しみを消し、「嘛」は阿修羅闘争の苦しみを消し、「呢」は人間の生老病死の苦しみを消し、「叭」は畜生の使役の苦しみを消し、「咪」

は飢餓や渇きの苦しみを消し、「吽」は冷たい或いは熱い地獄の苦しみを消すという意味を表している。

六字真言は、梵語、チベット語、漢語と日本語で以下のように記される（写真1）。

元来、チベット、内モンゴル、外モンゴルの各地域に於いては、観音菩薩の信仰が強く、そのため観音菩薩に対する六字真言は強い影響を持っていた。六字真言は、内モンゴル地域におけるオボやラマ教寺院の建築物やマニ筒などに書かれており、現在でもよく見ることができる。六字真言についてラマ教寺院のなかで口述される物語によると、モンゴル地域にチベット仏教がまだ伝入されてなかった頃、六字真言は天から落ちてきた物であり、そのため六字真言は天書と呼ばれている。

(2) マニ法会の由来

ラマ教においてマニ法会の由来に関して、ラマ僧の間で代々伝えられている口述伝承がある。それによると、昔、天竺国（インド）に、インラ菩提の娘でボロウムと言う娘がおり、彼女は幼年にして聡明を極めて、深く仏教を信奉していた。そのため、ボロウムは、大人になったら出家して尼僧になりたいと考えていた。しかし、ボロウムは突然不治の病に襲われ、体が腫れ上がり四肢が全く動かなくなってしまい、最後には、家畜と同じように飲食をするようになってしまった。

ある日、ボロウムがこの病苦に疲れ果て、褥草に眠りに入った。その時、夢のなかに彼女の亡父インラ菩提が手にボンブ（浄水宝瓶）を持って現れ、「ボロウム、この瓶の

中の甘露は観音菩薩に願い求めてできた物で、今、我がこれを以て汝の体を清めよう」と、瓶中の甘露水を彼女の頭の上より全身にかけた。さらに「汝の宿世のあらゆる悪業は、既に観音菩薩のこの甘露水により清らかに洗い流された。今後、観音菩薩を一心に信仰し、一心に六字真言を念じ、仏道に修行すべし。然らば必ず観音菩薩に済度せられ、無上菩提の真理を悟ることを得る」と告げて消え去った。

ボロウムは夢から醒めると、今までの病苦から解放されていた。それからボロウムは、観音菩薩を専心に信仰した。ボロウムは1日中、一心に「唵、嘛、呢、叭、咪、吽」を誦してひたすら帰依の至誠を傾け、それを半年間続けた或る日の夜、観音菩薩が眼前に現れ、「汝の疾病は汝が敬虔な修行をすることにより、既に宿世の悪業をことごとく取り除いた。これから、なお衆生済度の為に念願を立てて広くマニ法会を開き、衆生から汝の如く悪業を取り除きなさい。然らば汝の功德は必ず菩提を成就できます」と言った。これによりボロウムは菩薩の言を奉じ、常にマニ法会を一般の善男信女に観音菩薩の慈悲や功德を伝える働きを行った。そのため、ラマ教に於いてマニ法会は、信者に観音菩薩のような慈悲に向かい教化することにある。即ち、ラマ僧達の日常生活に於いて口から発せられる念仏やマニ筒(写真2, 3, 4, 5)に込められているものは、すべて六字真言或は観音の真言である「唵、嘛、呢、叭、咪、吽」である。

(3) 千手千眼観音菩薩

ラマ教において観音菩薩は千手千眼観音

菩薩、四臂観音菩薩、白度母と緑度母など全部で三十二化身と呼ばれている。マニ法会に於いては、主として千手千眼観音菩薩を供養している。

千手千眼観音の法相は十一面観音菩薩と称し、八臂、千手、そして掌ごとに一つの目があるのが、千手千眼観音菩薩の姿である。十一面には面毎にその特殊な代表的な意義がある。前の三つは慈悲の様子であり、善行をする衆生に会う時に現れる慈悲で喜ばしい様子である。左の三つは怒る様子で、悪行をする衆生に会う時に現れる大悲救苦相である。右の三つは白い歯が外に出て、浄業の衆生に会う時に贅嘆する様子である。最後の両側は暴戻相で、善悪の様々な衆生に会う時、それに良い凶悪を直させるために現す笑相である。頭のとっぺんの仏陀面は衆生のために現した説法の様子である。「千手千眼」観音菩薩は非常に大きな功德を象徴している。千手はたくさんの衆生を救済する良い方法があって、すべての衆生を守り保つことである。千眼は六道の衆生を詳細に観察することができ、大慈大悲、法力の手段は限りがないと表している。千ははなはだ多いことを表して、一つの数字の極限ではない。そのため、千手千眼も仏法は限りがないと表して、手段の尽きることがないという意味である。諸菩薩の中で、観音菩薩はその世を救う功德で民間の間に影響が深い(写真6)。

3. マニ法会の時期

内モンゴルのラマ教寺院のマニ法会は、チベットから伝わったもので、チベット語ではノネンと呼ばれる。内モンゴルでは、

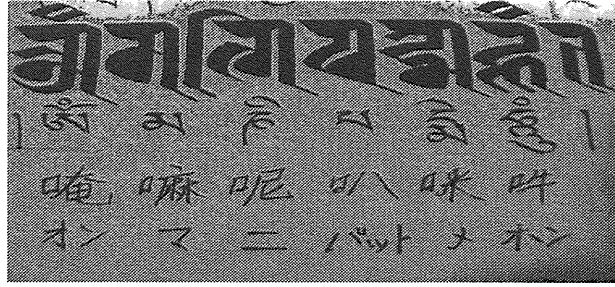


写真1：六字真言

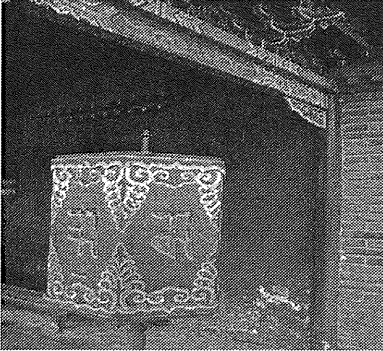


写真2：木製のマニ筒



写真3：銅製の大マニ筒

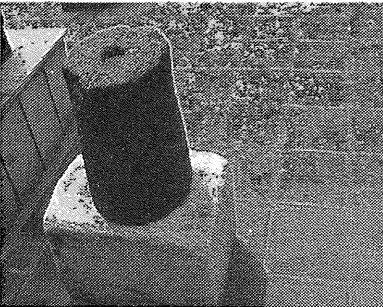


写真4：石製のマニ筒



写真5：銅製のマニ筒

写真6…千手千眼観音

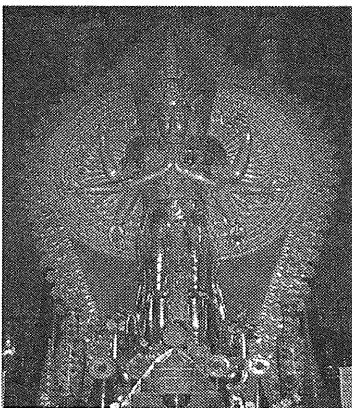


写真7：第一回目のマニ法会に参加したラマ僧

中国の建国以前から1965年頃までは内モンゴル自治区のすべての地方のラマ寺院に於いても、マニ法会は行われていた。しかし、1966～1976年までの文化大革命が原因によりすべての宗教活動が禁止された。1977年から「宗教信仰の自由」という政策が始まった。その後から、内モンゴルにおけるラマ教の宗教活動が徐々に再開され、マニ法会も行われるようになった。例えば、内モンゴルの包頭（ポウトウ）地域の五当召寺では、1978年頃からマニ法会は再開されることになった。しかし、大召寺のマニ法会は、1995年に再開された。マニ法会の再開が遅れた原因は、マニ経を誦することができるラマ僧が当時の大召寺には70歳以上になるラマ僧1人しかいなかったためである。この当時の大召寺には、全部で25人のラマ僧がおり、その内訳は70歳以上3人、60歳以上1人、50歳以上で常勤する僧3人、法会の時だけ参加する僧1人、会社に勤めながらのラマ僧1人、20歳以上8人、10歳以上8人であった（写真7）。

マニ経を誦することができたラマ僧は、「ザムスウ・ザトバ」と言い、私の恩師である。恩師が私達にマニ経を教授された。その時に教授されたため誦することができた。これにより、大召寺では、旧暦の8月14日から8月21日まで7日間、マニ法会を挙行することになった。マニ法会を挙行する時期は、各地域、各寺院によって異なっている。例えば、五当召には7月23日～8月1日までの8日間かけて行われている。（理由は上に記述した。）

4. マニ法会の供養物

マニ法会は大召寺の年中行事に於いては特殊な法会である。それは、マニ法会では、必ずマニ丹と言う供養物を加持する為である。又、マニ法会においては、すべてのラマ僧は肉食を取らず精進潔斎をすることになり、この8日、或は168時間かけて不眠不休で六字真言の念誦を続けることも特殊な法会である。本来このマニ法会は、昔、観光客や信者などは見ることが出来ない法会であった。しかし、この規則は現在、モンゴル地域に於いては五当召寺でしか守られていない。

大召寺においてマニ法会を行う為には、まず、菩薩殿を掃除し清潔にすることが必要である。その後、千手千眼観音菩薩の前に据えられている方形卓を黄色の布で覆い、その上に蔵紅花（チベット産のサフラン）を散らし、この卓の後ろには立方体の宮殿の形の仏壇を置き、その中に千手千眼観音菩薩の「漫陀羅」というタンカ（チベット仏教で用いられる掛け軸形式の宗教画）を置く。又、その仏壇の前には、チベット仏教中の25種類（或いは18種類とも言われる）の浄薬（蔵薬）より組み合わせて粉末を作った「サンルー」という物を少しハダカムギ粉と混ぜ合せ、それを以って作った「バリン」と言う三つの塔の形をした物を供養してある。「サンルー」がない場合には、マニ丹を代わりに使うこともできる。「バリン」という物は、チベット仏教に於いては、仏像によってバリンの形が異なる。

三つのバリンの真中の物は、高さ5寸程度あり、これは千手千眼観音に対して供養するものである。そのほかの左右の二つは、

真中のバリンと比べて高さが低い。これは、護法或は土地神に供養するものである。バリンの前には、七珍八宝（供物台に荘厳具として置かれた物）、果物、六供（水、米、花、香、灯、塔という物）、花などを供養して供える。

5. マニ法会の行事

大召寺のマニ法会には、マニ法会の始まる3日前から、内モンゴル各地のラマ僧が続々と集まってくる。その時に集まったラマ僧たちは、大召寺から食べ物と住む所を提供される。マニ法会の前日より、マニ法会を行うラマ僧衆が精進潔斎し、肉食を断つ。マニ法会前日の午後7時頃には、20分ほどの時間をかけて「ビレー」（写真8）と言うラッパを吹く。これは翌日にマニ法会を挙行するという意味である。

以下、8月14日から8月21日までのマニ法会の詳細な内容である（表2）。

8月14日	
09：00～11：30	供養物を準備する
11：30～14：30	自由時間
14：30～15：00	銅鑼を叩く
15：00～16：00	六字真言を誦し宝瓶の中にマニ丹を入れる
16：00～18：30	「帰依経」「三聚経」「懺悔経」「三世経」「喝茶経（観音菩薩にミルク茶を供養する為の経）」「マニ経」「千手千眼観音経」「六字真言」等の順番で誦する
18：30～19：30	仏殿の周囲を回る
19：30～20：30	六字真言を誦する 交替で食事する（ラマ僧が半分残る）
20：30～3：30	六字真言を誦する（ラマ僧が4人残り、他のラマ僧は休む）
8月15日～8月20日	
03：30～06：30	「帰依経」「三聚経」「懺悔経」「三世経」「喝茶経」「マニ経」「千手千眼観音経」「六字真言」等の順番で誦する
06：30～08：30	交替で休憩し、食事する（ラマ僧が10人残る）
08：30～12：00	「帰依経」「三聚経」「懺悔経」「三世経」「喝茶経」「マニ経」「千手千眼観音経」「六字真言」等の順番で誦する
12：00～14：30	交替で休憩し、食事する（ラマ僧が10人残る）
14：30～18：30	「帰依経」「三聚経」「懺悔経」「三世経」「喝茶経」「マニ経」「千手千眼観音経」「六字真言」等の順番で誦する
18：30～19：30	仏殿の周囲を回る
19：30～20：30	六字真言を誦する 交替で食事する（ラマ僧が半分残る）
20：30～03：30	六字真言を誦する（ラマ僧が4人残り、他のラマ僧が休む）

右写真8…ピレ

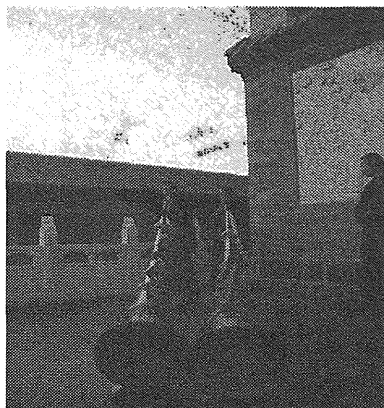
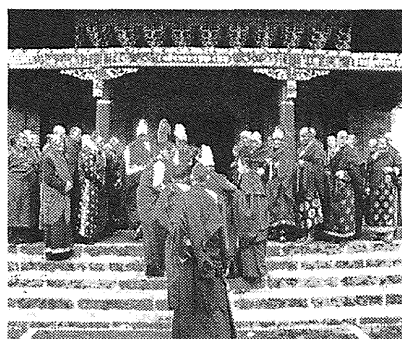
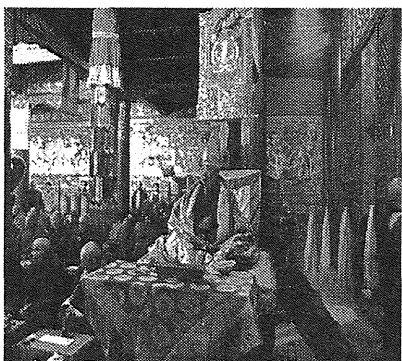


写真10…大ラマが最初に殿堂の中に入る



右写真12…首座大ラマ



右写真14…鈴を使ってマニ丹を宝瓶に入れる

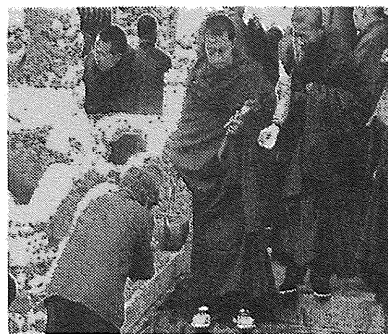


写真9：甘露水でうがい手洗いをを行う

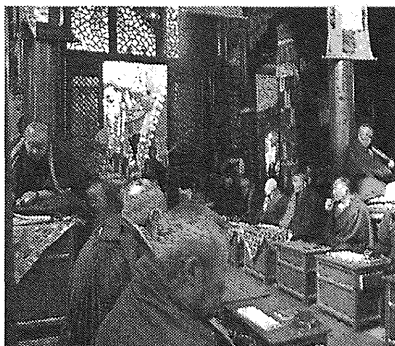
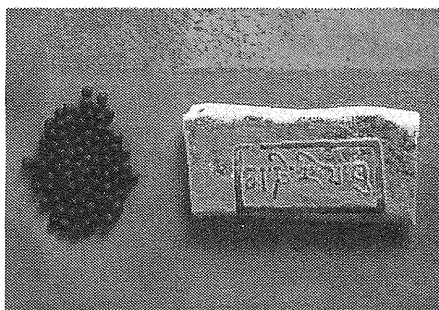


写真11：左：大経頭 右：二経頭

右写真13…マニ丹



右写真15…ドルジを五色の糸で結んだ物を宝瓶に入れる



大昭寺2010年マニ法会の行事（表2）

8月21日
03：30～06：30 「帰依経」「三聚経」「懺悔経」「三世経」「喝茶経」「マニ経」「千手千眼観音経」「六字真言」等の順番で誦する
06：30～08：30 交替で休憩し、食事する（ラマ僧が10人残る）
08：30～12：00 「帰依経」「三聚経」「懺悔経」「三世経」「喝茶経」「マニ経」「千手千眼観音経」「六字真言」等の順番で誦する
12：00～14：30 交替で休憩し、食事する（ラマ僧が10人残る）
14：30～15：30 マニ宝瓶をもって仏殿の周囲を回る
15：30～16：30 ラマ僧と信者にマニ丹を一包ずつ配る
16：30～18：30 法会期間に布施を行った信者たちの名前を呼んで平安経を誦する
終了

旧暦8月14日、マニ法会一日目の午前、上述の供養物を準備し、午後の2時半から菩薩殿の二階で銅鑼を叩き、ラマ僧たちを集める。銅鑼の音を合図として、僧房から菩薩殿の前に2人、3人と続々とラマ僧が集まり来る。甘露水でうがい手洗いをを行い（写真9）、菩薩殿の入り口の前に2列に並ぶ。銅鑼の音が30分程続いて、最後の銅鑼の音を合図に大ラマが最初に殿堂の中に入り（写真10）、続いて並んでいた僧たちが殿堂に入る。殿堂の中では、ラマ僧の地位によって席が決まっている。ソックチャンオンザト（大導師 写真11）は、先に経を誦し始めて、その後ラマ僧たちが続いて経を誦する。ここで誦されるのが六字真言であ

る。六字真言を誦する時に、首座大ラマ（写真12）の席で4名のチャビレ（助手）というラマは「マニブンプ」と言う宝瓶の中に、25種類のチベットの品物より作ったマニ丹（写真13）を、ホンクという鈴を使って宝瓶に半分満ちるほど量り入れる（写真14）。量り入れる際には、鈴で何杯入れたかを必ず覚えておく。その後、「ドルジ」（金鋼杵）という物を五色の糸で結んだ物を宝瓶に入れ（写真15）、その上に赤い布を被せて、その上に柏木の葉を挿し（写真16）、その上には観音菩薩を乗せて、五色の糸で固定する。その最後に「黄色ハター」と言う黄色の織物を以って外側を包み、これを上述の千手千眼観音菩薩の漫陀羅の前に安置する（写真17）。

五色糸は赤、黄、青、白、緑色の糸をもって撚り合わせた一本の30メートルほどの長い糸である。この五色糸の一端を2本に合わせてドルジを結びつけ、もう一方の端を2本に分けて、ソントク（25センチほどの木の棒）（写真18）を二つ結びつける。

この五色の糸とソントクは、マニ法会の行われる8日間に頻繁に使われる。マニ法会の成就に至るまで手離すことができないものである。従って、この五色の糸とソントクは法会の間、床に落ちたり、汚れた手で触ったり、五色の糸を跨ぐことを忌む。即ち、ラマ僧たちは、ソントクを持って読経し、五色の糸を通じてマニブンプ中のマニ丹を加持することになる。これは、マニブンプとラマ僧をつなぐ、電話機と電線のような関係である。

午後4時からソックチャンオンザト（大導師）は先に経を誦し始めて、その後ラマ



写真16：マニポンブの上を赤い布で被い、
その上に柏の葉を挿す

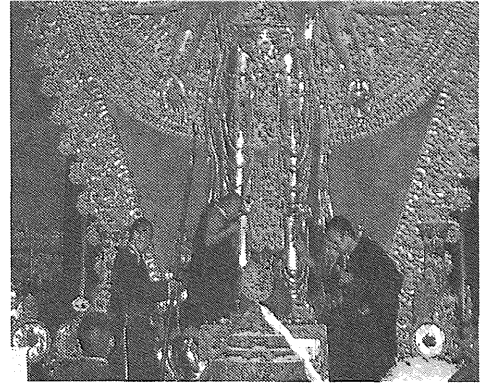


写真17：千手千眼観音菩薩の曼陀羅の前に
マニポンブを安置する



写真18：2010年8月15日の3：00「ストク」
を持って六字真言を誦する

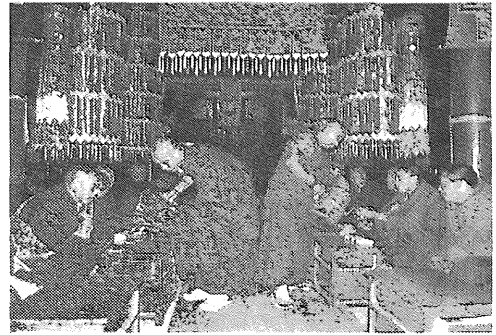


写真19：ラマ僧たちがバター茶を飲む

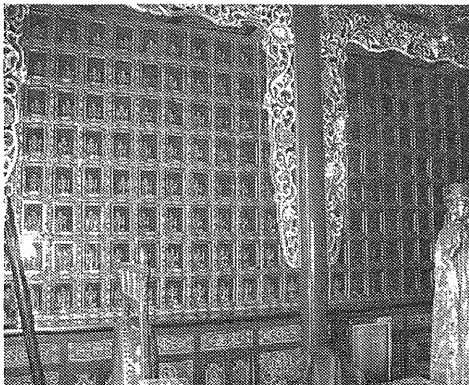


写真20：信者が殿内で供養する仏像



写真21：信者が殿内で供養する仏像

僧衆は経を誦する。「帰依経」「三聚経」「懺悔経」「三世経」「喝茶経（写真19）」「マニ経」「六字真言咒」等の順番で誦する。その後、六字真言呪を唱える。その際には、マニ丹を加持に従事すべきラマ僧衆は、マニ経を誦終る直前、順次その五色の糸を搓って手に持ち、唵、嘛、呢、叭、咪、吽を唱える。法会に参加すべき僧侶達の精神力を以ってマニブンプ中のマニ丹を加持しマニ丹を煉る。すなわち、マニ法会の成就のために、マニブンプ中のマニ丹が増加して、マニブンプを充満させることを求める。

このマニ法会に参加すべきラマ僧の人数は160人におよんだ。マニ法会の際には、他の法会と異なり、より多くのラマ僧が参加することが求められる。理由としては、マニ丹に対してより強い法力を与えることができる為である。

橋本光寶は『蒙古の喇嘛』（1942）の中で、「浄瓶に充満したウリルは、長老喇嘛によって素早く他の容器に移されなければならない。若し浄瓶の蓋を取り他の器に移すことが、遅れるときは折角誦出したウリルは空中に飛散すると言ふからである」[橋本1942：20]という内容を記述している。ここにある「ウリル」とは、マニ丹のことである。王永宗は「喇嘛教の年中行事」（1941）の中で「斯くて日夜間断なく六字真言を唱へ、手に持たせる糸を通じて精神を奔巴の中に貫注するときは、大抵七日目頃（長くとも三週間頃）に至れば、奔巴の中より一種物音の響きあるを聞ゆべし。是れ乃ち丹丸成就の徴候にして、法力により次第に増加を来せる鳥力勒が奔巴に一ぱい充満する

に至りたるを示すものなりと云ふ」[王1941：7]と記述している。このような物語は、現在も内モンゴルに残っている。それは特に五当召寺において顕著である。しかし、老ラマ僧が減少してきている現在においては、このような物語も減少してきている現状がある。

内モンゴルのラマ教において、マニ丹は、神秘的な神薬であると言われる。そのため、マニ法会終了後、一般信者は寺院にマニ丹一包を求めに伺う。それを持ち帰り、仏壇や家の中のきれいな高い場所に大事に保存する。大事に保存することによって、マニ丹が増えると言われている。このマニ丹は服用することにより、来世において地獄に行くことはないようになり、どのような病気に対しても効果があるといわれている。

このようなマニ丹を成就するために、168時間不眠不休でマニ法会に参加するラマ僧は、精神を集中する為に少なくとも必ず二班を設け輪番で交替し誦経を行う。一般的な寺院においては、ラマ僧の数が少ない為に、マニ法会を行う事が困難となっている。そのため、現在の内モンゴルフフホト市におけるラマ寺院においては、このマニ法会を行う事が出来るのは、僅かに大召寺のみとなっている。

おわりに

2010年8月大召寺のマニ法会の現状を調査した結果、私が大召寺にいた時と比して大きく変化したことが明らかになった。2004年までは、マニ法会が3日間しか行われていなかった。老ラマ僧から、大召寺では元々、マニ法会が3日間行われると聞いていた。

しかし、それが2004年から2007年の間に、マニ法会が5日間に変わった。さらに、それが2007年からは、マニ法会が7日間になり、それが現状となっている。その背景には、マニ法会では布施により大きな収入を得ることができるということがある。マニ法会が回復した1995年には、3日間で布施による収入が2万円ほどであった。それが2003年には、4万円ほどの収入があった。以上の内容から、マニ法会に参加する信者が多くなってきたことが表われている。

2010年8月に調査したマニ法会の現状と1995年から2004年までのマニ法会と比べて、内容には根本的な変化がないが、法会の情景と雰囲気が変わってきた。例えば、2004年以前は、マニ法会に参加するラマ僧が60人程度で、信者がラマ僧より多い。深夜に信者がラマ僧と一緒に六字真言を誦し、信者の声がラマ僧より大きいと感じていた。現在は、ラマ僧が120人になって、2004年の2倍に増えた。しかし、信者は10人しかいなかった。深夜にラマ僧と六字真言を誦する信者は一人もいなかった。旅行者が多くなって、マニ法会に参加する信者が減少して、信者からの布施も減少している。この減少の原因は、現在の内モンゴルのラマ寺院の観光化である。大召寺の入場料が2004年以前と比べて3倍に高騰し、信者やさらには関係者の入場の規制が強化され、寺院と一般の人々の距離が遠くなったことが原因である。さらに、現在の内モンゴルでは、ラマ僧に対し、「お金持ち」「知識やマナーが低

い」という否定的な見方が広がっていることも背景にはある。これらの事から、現在においては、マニ法会に参加する信者が減少しているという現状がある。

しかし、一方では、大召寺に対し、多額の布施を行う裕福な信者が増加している現状もある。大召寺においては、このような多額の布施を行った信者の個人の仏像を殿内で供養するなど特別な計らいを行っている現状である。このような個人の仏像が6000体ほど存在している（写真20、21）。

このように大召寺におけるマニ法会だけを見ても、内モンゴルにおける信仰の変遷が見られる。今後も、内モンゴルにおけるラマ教の信仰の変遷を調べ、そこから、現在の社会や経済的な流れの中で、ラマ教がどのような発展を目指すべきか考えて行きたい。

参考文献

- 橋本光賢『蒙古の喇嘛』佛教公論社、1942年
長尾 雅人「蒙古学問寺」全国書房刊、1947年
長尾 雅人「蒙古喇嘛廟記」高桐書院、1947年
王永宗「喇嘛教の年中行事」安念一郎編『蒙古研究』第三巻第五・六号、蒙古研究会、1941年
德勒格「内蒙古喇嘛教史」内蒙古人民出版社、1998年
編集委員会「土默特志」（下巻）内蒙古人民出版社、1987年